

# 肺がん患者からの質問と看護師が必要と認識する患者教育

石原 和子<sup>1</sup>・安藤 悦子<sup>1</sup>・中村エイ子<sup>2</sup>・江藤 栄子<sup>2</sup>  
小林 初子<sup>2</sup>・下田 澄江<sup>2</sup>・志水 友加<sup>3</sup>

**要 旨** 肺がん患者に有用性のある患者教育プログラムを提供するためには、幅広い情報源を得る必要がある。その第一段階として臨床における看護師が肺がん患者から受ける質問と看護師が必要と認識する患者教育についてアンケート調査を実施した。倫理的配慮として看護部にアンケート調査の趣旨を説明し協力をお願いした。看護師長会を通して承諾が得られ、調査の趣旨を理解し同意を得られた58名の看護師を対象者とした。アンケート構成はGertrud Grahnら（1990）の先行研究に基づいた9項目である。対象者58名の看護師は、外科病棟看護師29名と内科病棟看護師29名である。臨床経験年数は、1年～10年未満56.8%、11年～20年22.4%、21年以上19.0%、未回答1名1.7%であった。看護師が患者から受けた質問は、「身体の正常な働き」、「治療法」、「副作用」に関する項目が収集された。一方、看護師が必要と認識する患者教育も「身体の正常な働き」、「治療法」、「副作用」に関する項目であった。患者教育プログラムを開発するに当たって第一段階の調査は、臨床看護師が患者から受けた質問と看護師の必要と認識した患者教育プログラムの項目に差異はなかった。

長崎大学医学部保健学科紀要 16(2): 13-22, 2003

**Key Words** : 肺がん患者, 患者教育プログラム, 臨床看護師の認識, 患者教育

## <文献レビュー>

Wilson-Barnett & Osborne (1983), Rimer et al. (1985), Engstrom (1986) らの先行研究において、患者は医療スタッフが提供する詳しい情報の提供を望んでいることを報告している。適切な情報を与えられた患者を対象に行ったプロスペクティブ (prospective) 研究のHenriques et al. (1980) は、適切な情報を提供することが患者の生活の質に良い影響を与えることが可能であることを示唆している。Derdiarin (1986) は、患者への情報提供が不足しているとするレトロスペクティブ (retrospective) 研究の報告をしている。このように患者に適切な情報が提供されていないということが、がん患者にとってがんと共に生きていく上での障壁の一因となっていることを示唆している。Rimerら (1985) は、がん治療において患者のニーズを数回にわたりチェックした調査報告を評価検討している。米国がん協会 (American Cancer Society) の“I Can Cope”プログラムを開発する際に大規模なニーズアセスメントを行った (Johnson & Flaherty 1980, Johnson 1982)。この研究は、患者の学習ニーズを判断し、アセスメントを実施する上で参考にすることができる。患者の理解を高め、ヘルスケアに参加させる方法や手段を提供すると共に、患者の積極的な参加を促す。学習のプロセスは、個人や特定の学習ニーズ、学習準備、興味および学習能力

などを満たすよう計画された教育経験からなっている。患者の教育は個々に適したものであり、アセスメントをし、文章にして評価することができるものでなければならぬ。患者や家族の者が診断や治療計画について説明を受ける際にのみ行われるものであってはならない。がん患者やその家族のための学習プログラムのニーズを理解するためには、先ず治療を通じて患者と家族が必要とする学習ニーズをアセスメントすることが必要である。また、患者の看護に直接あたる看護者の意見もアセスメントする必要がある。複数の情報を収集することで、患者のニーズを知る上で幅広いデータベースが得られる。

## はじめに

近年、慢性疾患における患者教育は、患者が自分の健康管理について積極的に参加することを目的に意図的そして系統的にプログラムされているものへと変貌してきた。1998年に肺がん患者110名 (男性94名、女性16名) を対象に行った研究「肺がん患者のインフォームド・コンセント (ICと略す) と看護師の役割」で、IC後の患者や家族からの質問が少なかったこと、また治療に対する患者の自己決定も41.8%と低いことが明らかになった<sup>1)</sup>。この結果を踏まえて、肺がん患者に有用性のある教育プログラムを提供するためには幅広い情報を得る必要があると考えた。そこで、第一段階として内科系病棟

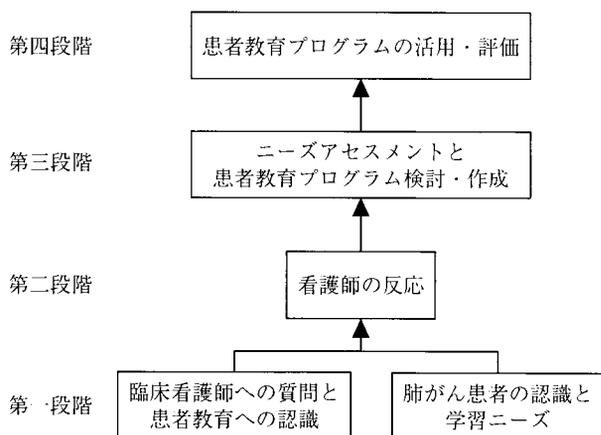
1 長崎大学医学部保健学科

2 長崎大学医学部・歯学部附属病院看護部

3 千葉大学看護学部看護学修士課程

および外科系病棟における臨床看護師が肺癌患者から受ける質問と看護師が必要と認識する患者教育プログラムについて半構成的アンケート調査を実施した。

### 1. 研究の概念枠組み



#### <概念枠組みについて>

上記概念枠組みは、肺癌患者に対して意図的そして系統的な教育プログラムを提供するための第一段階として、①肺癌患者の認識と学習ニーズに関する調査として、・肺癌に関する認識と肺癌患者はどのような学習を希望しているかの情報収集、②臨床看護師への質問と患者教育への認識に関する調査として、・看護師は臨床で肺癌患者からどのような質問を受けたか、そして、看護師は肺癌患者へどのような教育プログラムを必要と認識しているかの情報収集をする。

第二段階は、看護師の反応として、第一段階の調査結果を踏まえて、①肺癌患者の学習ニーズの優先順位、②看護師が必要と認識する学習の優先順位に関して、外科系と内科系の臨床看護師にその優先順位について再度調査を行う。

第三段階は、第二段の調査結果を踏まえて、患者教育プログラムを検討し作成する。

第四段階は、その教育プログラムに基づいたパイロットスタディを実施し、教育プログラム参加者を通して教育プログラムの妥当性、心理テスト、自己チェックリスト、プログラムに対する評価と検討を行う。

### 2. 研究目的

第一段階として、手術療法と化学療法の目的で入院した肺癌患者から外科系と内科系看護師はどのような質問を受けたか、そして、看護師が必要と認識する患者教育プログラムを明らかにする。

### 3. 研究対象と方法及び期間

肺癌患者の入院している外科系病棟と内科系病棟に勤務する臨床看護師を対象とした。倫理的配慮として、看護部を通してアンケート調査の趣旨説明を行い、看護

師長会においてアンケートに対する理解と承諾の段階を得て、58名のスタッフ看護師からアンケート調査の承諾と協力が得られた。調査期間は、平成14年5月15日～6月21日とした。アンケート調査票の配布と回収は外科系病棟と内科系病棟看護師長を通して行われた。

研究デザインは、ニーズアセスメントの調査を実施するに当たりニーズアセスメントの確固とした基礎的調査がなされ、がん患者の教育プログラムで評価されている Gertrud Grahnらの<sup>2)</sup>の先行研究に基づいた項目とした。本調査を実施するに当たって4名の看護師によるプレテストを行った。アルファ係数は0.9608であった。プレテストの結果を踏まえてアンケート内容を再構成した。アンケート構成内容は、表-1の9項目とした。データ集計で患者からの質問の多い頻度について、よくある：4点、時々ある：3点、めったにない：2点、全くない：1点とした。患者教育の必要性について、必要あり：1点、必要なし：0点とそれぞれ得点化した。データ集計の分析は、統計パッケージWindows版SPSSを使用し、有意差はMann-Whitney検定を用いて、 $P < 0.05$ を有意差ありと判定した。

表 1. 質問内容

①身体の正常な働きに関すること
②肺癌に関すること
③肺癌の民間療法に関すること
④肺癌の治療と副作用に関すること
⑤肺癌の疼痛対策に関すること
⑥肺癌と栄養に関すること
⑦肺癌と心理社会的問題に関すること
⑧がん疾患の医療費と社会支援に関すること
⑨在宅ホスピス・緩和ケアに関すること

### 4. 研究結果

対象者58名は、内科病棟看護師29名と外科病棟看護師29名である。対象者の経験年数は、1年～10年未満33名(56.8%)、11年～20年未満13名(22.4%)、21年以上11名(19.0%)、無回答者1名(1.7%)であった(図-1)。

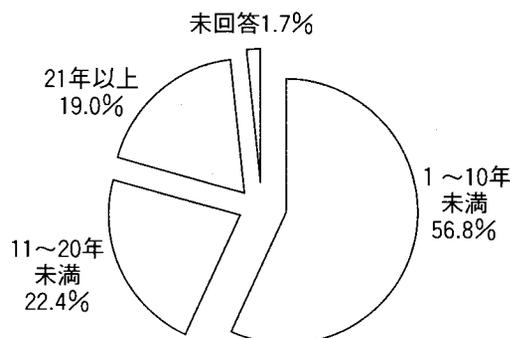


図 1. 対象者の臨床経験年数

入院中の患者から受けた質問が多かった項目は、「肺がんの治療と副作用」で、その細項目の高い順の平均値は、「化学療法の副作用」、「肺がんの治療法」、「放射線療法の副作用」、「副作用対策」、「治療による身体像の変化」であった。次いで、「身体の正常な働き」、「疼痛症状の管理」、「肺がんの再発」、「造血器の機能」、「疼痛の自己管理」の順で上位10項目であった（表-2）。

表2. 患者からの質問頻度と得点平均値（N=58）

細項目内容	平均値	頻度
①化学療法の副作用	3.09	57
②肺がんの治療法	2.91	57
③放射線療法の副作用	2.91	56
④治療による副作用対策	2.86	57
⑤治療による身体の変化	2.82	57
⑥各臓器の正常な働き	2.62	58
⑦効果的な疼痛対策	2.52	56
⑧肺がんの再発	2.43	58
⑨造血臓器と血液組織の正常な働き	2.37	57
⑩疼痛緩和のセルフケア	2.31	52

一方、看護師が必要と認識する患者教育の平均値の項目は、「身体の正常な働き0.98」、「化学療法の副作用0.98」、「放射線療法の副作用0.98」、「肺がんの治療法0.98」、「副作用対策0.96」、「炎症、食思不振時の工夫0.96」、「疼痛対策0.96」の順で上位7項目であった。

看護師が必要と認識する患者教育と患者の学習ニーズの高い10項目において、「身体の正常な働き」、「肺がんの治療法」、「治療の副作用対策」、「効果的な疼痛対策」、「がんの情報を得る窓口」の5項目については一致していた（表-3）。

内科系病棟看護師と外科系病棟看護師の必要と認識する患者教育プログラム項目で、「造血器の機能」、「治癒

と生存率」、「治療の可能性」の項目で有意差が見られた（ $P<0.05$ ）。

## 5. 考 察

臨床における肺癌患者は、主治医からインフォームド・コンセントの口取りに関する相談を受けて患者は家族と連絡し相談の上、主治医と患者の双方が調整して日程が決定されている。看護師はインフォームド・コンセントの場に同席し、その後の患者と家族の補足説明や精神的ケアの役割を果たしている<sup>1)</sup>。肺癌患者は入院期間中に医師からの説明やその後の看護師による補足説明を受けたとしてもすべて理解することは困難である。患者は肺がんと診断されたことによる極度のストレスや精神的不安がコミュニケーションを困難にしている。がんと診断された時の最初の反応は、不安、恐怖、失意、憂鬱、虚脱、心気症、依存症などが最も高い頻度で生じると報告されている<sup>2)</sup>。患者の一番身近にいる臨床の看護師は入院中から外来通院を通して、内科系病棟の受け持ち看護師は化学療法を受ける肺がん患者へ治療を受ける前に一連の副作用対策に関してパンフレットを用いた指導を行っている。特に患者とその家族に指導する内容は、感染予防対策、出血予防対策や栄養補給に関することである。しかし、患者とその家族は感染の予防や出血の予防を行わねばならない根拠を理解することが難しく患者の行動変容に結びつかないこともある。患者はなぜこのような身体の状態になるのかといったことに対する必要な情報源について実際的な情報を提供する機会のある看護師を十分に活用していないということが推測される。今回の調査において、看護師は「身体の正常な働き」、「治療法」、「副作用」に関する内容について患者から質問を受けたと回答しており、患者が知識を高めるための方法や手段を提供することが適切であるという考えを示唆している。また、看護師もこれらのトピックについて患者教育プログラムの必要性を認識していた。患者教育の定義は、患者が健康を達成し、また保持できるように

表3. 患者の学習ニーズと看護師が認識した患者教育の必要性

看護師（N=58）	人数	患者の学習ニーズ（N=46）	人数
①各臓器の正常な働き	54	①効果的な疼痛対策	40
②化学療法の副作用	54	②肺がん転移	38
③放射線療法の副作用	54	③肺がんと食生活	38
④肺がんの治療法	53	④がんの情報を得る窓口	38
⑤治療による副作用対策	53	⑤各臓器の正常な働き	37
⑥治療による身体の変化	52	⑥肺がん再発	37
⑦効果的な疼痛対策	52	⑦肺がんの治療法	37
⑧肺炎や食思不振時の対応	52	⑧肺がんの治癒と生存率	37
⑨がんと社会福祉制度の活用	52	⑨治療による副作用対策	37
⑩がんの情報を得る窓口	51	⑩医療者とのコミュニケーション	37

援助するための情報の提供である。情報は力であり、患者はがんを持ちながらもよりよい生活を望んでおり有効な情報を与える必要性を医療従事者に示している<sup>3, 4, 7, 8, 11, 12)</sup>。

#### まとめ

外科系と内科系における臨床看護師58名のアンケート調査結果から、肺がん患者からの質問と看護師が必要と認識する患者教育プログラムについて次のように集約することができた。臨床看護師は、「身体の正常な働き」、「治療法」、「副作用」に関する項目の質問を多く受けていた。一方、看護師が必要と認識した患者教育プログラムも、「身体の正常な働き」、「治療法」、「副作用」に関する項目であった。患者教育プログラムを開発するに当たって第一段階の調査は、臨床看護師が受けた質問と臨床看護師の必要と認識した患者教育プログラムの項目に差異はなかった。

#### 引用・参考文献

- 1) 小林初子, 石原和子, 鷹居樹八子: 肺がん患者のインフォームド・コンセント (Informed Consent=IC) と看護婦の役割, 長大医短紀要, 13: 67-73, 1999.
- 2) Gertrud Grahn, Judi Johnson: Learning to cope and living with cancer-learning-needs assessment in cancer patient education-, Seminars in Oncology, 173-181, 1989.
- 3) Judi Johnson, Mara Flaherty: The Nurse and Cancer Patient Education, Seminars in Oncology, No.1: 63-70, 1980.
- 4) Judi Johnson: The effects of a patient education course on persons with a chronic illness, Cancer Nursing, No.5: 117-123, 1982.
- 5) 季羽倭文子: 疼痛と告知, 三輪書店, 東京, 1993, pp120-153.
- 6) 季羽倭文子: がん告知以後, 岩波新書305, 東京, 1993, pp42-50.
- 7) 石原和子: がんとソーシャルサポートーがん患者とその家族教育ー, 第3回日本行動医学学術集会, 栃木, 1996.
- 8) 田上和子, 飯塚京子, 張替幸恵, 大紫福子, 山田靖子, 新井美智子, 真鍋美保, 田村幸子, 大紫真寿美, 阿比留泰子, 赤池文子, 萬田良子, 石原和子: 告知されたがん患者教育のための学習ニーズの基礎的研究ー患者のニーズアセスメントー, 日本がん看会誌, Vol.11: 78, 1997.
- 9) 松本仁美: 入院治療を受けている肺がん患者のニーズ・アセスメントー日本語訳 Patient Needs Assessment Tool (PNAT) を用いてー, 日本がん看会誌, Vol.15: 75, 2001.
- 10) 水野道代, 有田広美, 相川奈津子: 外来がん患者のニーズを把握するための包括的なアセスメントツールの開発ーアンケート用紙作成プロセスー, 日本がん看会誌, Vol.16: 133, 2002.
- 11) 志水友加, 石原和子, 中村エイ子, 小林初子, 下田澄江: 肺がん患者の学習ニーズに関する研究, 日本がん看会誌, Vol.17: 55, 2003.
- 12) 石原和子: “I Can Cope” プログラム 米国ミネソタ視察研修に参加して, 長崎大学医学部保健学科紀要, 15(2): 1-6, 2002.

【資料】＜アンケート＞

I あなた自身の臨床経験年数について、いずれか1つを選び○を記入してください。

1年～5年未満	6年～10年未満	11年～15年未満	16年～20年未満	21年以上

II 以下の質問項目にお答えください。

- ・質問の頻度：質問項目について、いままでに患者や家族から質問を受けた頻度を回答欄4つ（よくある～全くない）から一つ選んで○を記入してください。
- ・患者教育の必要性：患者教育についてのあなたの考えを回答欄2つ（教える必要あり・教える必要なし）から一つ選んで○を記入してください。
- ・【その他】の項目には具体的な内容を簡潔に記入してください。

1. からだの正常な働きに関する質問

	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 各臓器（肺・肝臓・胃・膵臓・腎臓・心臓など）の正常な働きに関すること						
2) 造血臓器と血液組織（赤血球・白血球・血小板など）の正常な働きに関すること						
3) リンパ組織（リンパ腺・リンパ節・リンパ液など）の正常な働きに関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

2. 「肺がん」に関する質問

	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 「肺がん」はどのような病気か						
2) 「肺がん」の転移に関すること						
3) 「肺がん」の再発に関すること						
4) 「肺がん」と遺伝に関すること						
5) 「肺がん」の治療と生存率に関すること						
6) 「肺がん」を患ってからの生存可能な期間に関すること						
7) 「肺がん」が完治する可能性に関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

3. 「肺がん」の民間療法に関する質問

	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 「肺がん」の民間療法の効果と情報収集に関すること						
2) 現在行っている民間療法に関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

4. 「肺がん」の治療と副作用に関する質問

	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 「肺がん」の治療法に関すること						
2) 「化学療法（抗がん剤）」の副作用に関すること						
3) 「放射線療法」の副作用に関すること						
4) 副作用（脱毛・口渇・口内炎・食思不振・倦怠感・しびれ感・いらいら感）の対策に関すること						
5) 「肺がん」の治療による身体の変化に関すること						
6) 「肺がん」の治療（手術療法・化学療法・放射線療法など）による性生活の変化に関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

5. 「肺がん」とがん性疼痛の対策（治療）に関する質問

	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 効果的な疼痛対策（治療）に関すること						
2) 疼痛のためのセルフケアに関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

6. 「肺がん」疾患と栄養に関する質問

	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 「肺がん」と食生活（食物の種類・調理法・嗜好品など）に関すること						
2) 炎症で痛みがあったり、食欲がない場合の食べ物と調理法に関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

7. 「肺がん」疾患と心理社会的問題に関する質問

	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) ストレスの対処法に関すること						
2) 「肺がん」を患ってから家族とのコミュニケーションのとり方に関すること						
3) 「肺がん」を患ってから職場の仲間や友人とのコミュニケーションのとり方に関すること						
4) 医療従事者（特に医師）とのコミュニケーションのとり方に関すること						
5) 「肺がん」を患ったことによる情緒不安定の対処法に関すること						
6) イメージ療法・自律訓練法・瞑想法・音楽療法・ペット療法・アロマセラピーなどに関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

肺がん患者からの質問と看護師が必要と認識する患者教育

8. 「肺がん」疾患の医療費と社会的支援に関する質問	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 「肺がん」化学療法の治療経費に関すること						
2) 「肺がん」と社会保障の活用（申請手続きなど）に関すること						
3) 「肺がん」について情報を得る窓口に関すること						
4) 「肺がん」患者会（セルフヘルプグループ）の活動と情報に関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

9. 在宅医療（ケア）および在宅ホスピス・緩和医療に関する質問	質問の頻度				患者教育の必要性	
	よくある	時々ある	めったにない	全くない	教える必要あり	教える必要なし
1) 在宅医療（ケア）および在宅ホスピスや緩和医療における連携システムに関すること						
2) 在宅医療（ケア）および在宅ホスピスや緩和医療の内容に関すること						
3) 在宅医療（ケア）および在宅ホスピスや緩和医療の情報窓口に関すること						
4) 在宅医療（ケア）および在宅ホスピスや緩和医療の医療費に関すること						

【その他】上記の質問項目の他に、あなたが患者や家族から質問を受けた内容を記入してください。

貴重なご意見をいただきありがとうございました。ご協力に感謝申し上げます。

# The frequency of questions from lung cancer patients and the knowledge required by nurses when treating cancer patients

Kazuko ISHIHARA<sup>1</sup>, Etsuko ANDO<sup>1</sup>, Eiko NAKAMURA<sup>2</sup>, Eiko ETO<sup>2</sup>,  
Hatsuko KOBAYASHI<sup>2</sup>, Sumie SHIMODA<sup>2</sup>, Yuka SHIMIZU<sup>3</sup>

- 1 School of Health Sciences, Nagasaki University
- 2 Department of Nursing, Nagasaki University Medicine and Dentistry
- 3 Master's Program at Chiba University School of Nursing

**Abstract** To clarify the typical questions asked by lung cancer patients who were treated by surgical procedures and chemotherapy while hospitalized. A questionnaire was conducted after explanation the purpose to the Nursing Department hospital of N University Medicine and Dentistry, and then obtaining approval of the Head Nurses and the staff nurses of the internal and the surgical wards.

We carried out a questionnaire survey regarding the need to educate patients based on Gertrud Grahn et al. (1990). The questionnaire consisted of 9 questions about the characteristics of lung cancer diseases. Statistical analyses were made by using the SPSS statistical package for Windows, and a value of  $P < 0.05$  was considered significant on the Mann-Whitney test. Replies were obtained from 58 subjects. The subjects included 29 nurses assigned to the surgical ward and 29 nurses assigned to the internal ward. The duration of clinical experience was more than 1 year but less than 10 years in 56.8%, more than 11 years but less than 20 years in 22.4%, more than 21 years in 19.0%, and unknown in 1.7%.

**Conclusions:** The results of this questionnaire survey could be summarized as follows in terms of the nurses perception of the basic knowledge needed for lung cancer patients. Concerning the nurse's perception of educational support for cancer patients, it was determined that nurses need knowledge about "the normal functions of the human body" and "the treatment methods and their side-effects".

Through this study, it was confirmed that the staff nurses of the internal and the surgical wards did report receiving questions from patients, there were also the knowledge required on these same questions by nurses when treating cancer patients.

Bull. Nagasaki Univ. Sch. Health Sci. 16(2): 13-22, 2003

**Key Words** : Lung Cancer, Educational program for patient, The awareness of clinical nurses, Patient education